〔大学院ＧＰ〕採択

糖尿病者の「生きる」ことの心理臨床学的研究

A Research about How Diabetics live a life
from the Standpoint of Clinical Psychology

執筆代表者：大家聡樹(D3)　　教員：皆藤　章
執筆分担者：田中史子(D3)・築山裕子(D3)・西田麻衣子(D2)・
佐々木麻子(D1)・森崎志麻(M2)
研究協力者：清水亜紀子(GCOE 研究員)・高橋紗也子(M1)

〔研究目的〕

我々研究グループはこれまで、「糖尿病を抱えて生きるとはどういうことなのか」を検討するという目的のもとに、糖尿病者への個別面接調査や天理よろづ相談所病院内分泌内科石井均医師をはじめとした糖尿病者に関わる医療関係者との意見交換の場を通して、糖尿病者の「生きる」ことへの理解を深める試みをしてきた（荒木ら、2007；清水ら、2008)。そこから、糖尿病を抱えて生きるということは、「疾病」という枠にくくることのできない、医療と個人の生活が渾然と交じり合ったものであり、それはまさに彼らの「人生」にまで広がるテーマを含んでいると考えられた。

本研究では、前年度の研究で得られた知見をふまえ、糖尿病者への面接調査や医療関係者との連携をより進め、糖尿病を「生きる」ことへの心理臨床的な理解を深めることを目的とした。

〔研究経過〕

今年度の研究は、調査と調査事例の検討会を主とし、さらに論文執筆、学会発表活動、シンポジウムやジョスリン糖尿病センターのアラン・ジェイコブソン博士の講演への参加や博士を交えた「病」を抱えて生きるという視点から事例検討会を持ち、「糖尿病を抱えて生きること」についての考察を深めた。

さらに2008年8月にはシンポジウムを研究会で主催した。そこでは、我々の研究グループからの調査事例の発表と医療現場の看護師からの事例提供をうけて、天理よろづ相談所病院内分泌内科の石井均医師をはじめ、糖尿病に関わる医療関係者を交えて、事

例検討を行った。調査事例検討では調査内容を医療従事者に提示することができ、さらに被調査者への心理臨床的理解を共に深められたと同時に、医療従事者からの事例の提供によって、より広い視点から心理臨床的関わりということを考察にするに至った。

さらに本年度から京都大学医学部附属病院糖尿病栄養内科のクリニカル・カンファレンスへの参加をはじめ、実際の医療現場における症例発表に同席することによって、多くの症例に触れ、糖尿病への医学的考察、医療的視点を知ると共に、さらに心理臨床的考察を行うことで糖尿病への理解を深めた。

〔研究成果〕

今年度の活動の具体的な成果としては、論文執筆と学会発表の二つが挙げられる。

まず、論文執筆についてであるが、2009 年 3 月発行予定の『京大臨床心理シリーズ 8　身体の病と心理臨床』(大山泰宏・伊藤良子編、創元社) への論文執筆 (「糖尿病者への心理的アプローチの概観—糖尿病における心理臨床的視点の可能性」(大家他、2009))、そして、京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要への論文執筆 (「糖尿病治療にみる心理臨床的関わりの可能性－治療教育の歴史的概観を通して」(田中他、2009)) を行った。これらの中では、糖尿病者に関する心理学的研究の中で、われわれの行っている心理臨床学的研究を相対化する試みがなされた。

また、学会発表としては、昨年度おこなった調査研究の成果を、2008 年 10 月に愛知教育大学で開催された箱庭療法学会第 22 回大会において発表した。発表は、田中史子・清水亜紀子をそれぞれ代表者とし、『糖尿病者の「生きる」ことの心理臨床学的研究 I・II』と題して行われた。この中では、調査面接やその検討会における体験やディスカッションを、研究という公共性のある言葉にしていく試みがなされ、研究コロキアムメンバー以外の臨床家や研究者からのコメントをいただいたことで、われわれの立場を振り返る機会となり、糖尿病者と関わっていく際にわれわれが持っている心理臨床学的な視点を明確化することができた。